

日本、非主流派情報に依拠

アントニー・ベストさん 「大英帝国の親日派」

第二次世界大戦は日米戦争であり、日英戦争でもあった。イギリスのアントニー・ベスト・ロンドン大学上級准教授(司)は『大英帝国の親日派』(中央公論新社)を出版し、日英同盟を結んでいた両国がなぜ戦争に至ったかを検証した。来日を機に「失物の本質」を問いた。

日英関係が専門のベストさんは同盟でしる1907年代の自派の政治家、外交官らと多岐にわたる。両者の思惑の違いや情報分析の誤りに注目する。『日本側の失敗は、イギリスの情報非公式な秘密的グループに依存していたから』と指摘する。例えば、戦前期の外務省で影響力があった外交官の一人である重光葵は、英外務省のR.A.パトラーとの関係が深い。パトラーは、ナチストイデオロギイに対する寛容政策で知られるカイル・チエンバレン首相と好く、日本への寛容政策に肯定

的だ。ただパトラーは外務省の善悪派ではなかった。一方、駐日英国大使だったロバート・クレイヤーや、大英帝国の駐日武官だったF.S.G.ヒコットの親日派もイギリス

「親日」願望で見誤った外交

が日本に妥協すれば、日本のレベルな勢力が巻き返すと期待していた。しかし、1930年代後半の日本では、右翼のグループが勢力を拡大しているという現実があった。



「外交は道徳的な衝突を避けるためにある。全く違う見解の両国同士でも、外交交渉で相聞するとは限らない」と話すアントニー・ベストさん

重光は、日本の貿易問題について批判的な英政府の金融顧問、フレデリック・リース・フロの外交官といえるも都合のいい情報を信じてしまう。英政府内に親日的な意見があったのは事実だが、あくまで少数派。親日であってほしいと願う側から見ると、善悪に見えてしまうのだらう」と話す。

日英間の最も大きな誤解の相違は、中国についてだった。イギリスは中国が近代国家として成長し、有望な市場になることを望み、日本は政治、経



重光



R.A.パトラー



F.S.G.ヒコト

済的に支配できるような弱い中国を望んだ。戦争につながる決定的な違いに見えるが、外交政策で両国の関係を改善することはできたと思われる。

「イギリスにとって中国問題は、欧州の問題に比べれば優先度が低かった。日本側は、イギリスが中国から完全に手を引くことを望んだが、中国にあつたイギリス資本の銀行の文書を読むと、半分手を引くことがあれば、交渉の余地はあった」

日本では、当時のイギリスはアメリカに比べて友好的であった。日本は、日英関係をセンチメンタルに捉える傾向があると感じている。「宗教や人種などあらゆる面で異なる二国が、日英同盟を強固なものにする上で主義の交流や文化的な共通点を探めたい。センチメンタリズムがつくられた」。本書ではそれを取り除き、何が現実的な外交であったのかを示している。

人間は都合のいい情報を信じてしまう傾向があるが、それが外交に関わるのであれば問題が多い。それを避けるためには、相手国のイメージではなく、政治や外交政策が決まる過程を、文化的な面も含めて徹底的に解明して理解することが必要だ。ベストさんは現在、イギリスの外交官が、両国の日本に対する理解や世論を踏まえてどのような政策を展開したかを、1954年から1979年にわたるスパンで書いているという。そこには、今に生きる外交のヒントが詰まっているのだらう。

大英帝国の親日派

なぜ開戦は避けられなかったか

国は、

中公新書

定価 本体2300円(税別)

毎日、仕事に追われて死にぞろです。23歳でデビューし、その後予言するあんな言葉も残していた。2014年から放逐されているH.K.マシの書籍「神代遺書の秘宝」に出会い、さいとう・たかを、黒木千子の両氏と同業者の制作現場を紹介してきた。黒木さん、自身の制作現場

「時の流れは、時作にのみあつた。一生を送りながら、不遇のうちに死ななければならなかった詩人の苦悶。親類生業は、悲劇的だからえ

「もう、この作りのほかに、作者のありようも、(高橋時郎) むろ